

巨人の匙 ——ある昔話

メルヒエン

ルートヴィヒ・ベヒシュタイン著

鈴木満訳・注・解題

(一)

千歳もの⁽¹⁾ 齢⁽²⁾を闊⁽³⁾した柏⁽⁴⁾や樺⁽⁵⁾の雪の降り積もった梢⁽⁶⁾を、嵐⁽⁷⁾が凄⁽⁸⁾まじい勢⁽⁹⁾いで轟⁽¹⁰⁾轟⁽¹¹⁾と揺り動かしたので、雪とぎざぎざの水塊⁽¹²⁾が半ば凍⁽¹³⁾りついた地面⁽¹⁴⁾に音を立てて落下⁽¹⁵⁾した。飢⁽¹⁶⁾えた大鴉⁽¹⁷⁾や中鴉⁽¹⁸⁾は噎⁽¹⁹⁾れた啼⁽²⁰⁾き声を挙げながら霧⁽²¹⁾に包まれた叢⁽²²⁾林⁽²³⁾を飛び過ぎて行き、馴⁽²⁴⁾鹿⁽²⁵⁾は乏⁽²⁶⁾しい苔⁽²⁷⁾を食⁽²⁸⁾んで命⁽²⁹⁾を繋⁽³⁰⁾ごうと、四⁽³¹⁾苦⁽³²⁾八⁽³³⁾苦⁽³⁴⁾して雪⁽³⁵⁾を掻⁽³⁶⁾き退⁽³⁷⁾け、水⁽³⁸⁾牛⁽³⁹⁾は唸⁽⁴⁰⁾りながら太古⁽⁴¹⁾からの森林⁽⁴²⁾をうろつき回り、頑⁽⁴³⁾丈⁽⁴⁴⁾な樹⁽⁴⁵⁾の幹⁽⁴⁶⁾で小さな角⁽⁴⁷⁾の先端⁽⁴⁸⁾を磨⁽⁴⁹⁾くのだった。巨人⁽⁵⁰⁾アタフルフ⁽⁵¹⁾は道⁽⁵²⁾なき道⁽⁵³⁾を辿⁽⁵⁴⁾り、鬱⁽⁵⁵⁾鬱⁽⁵⁶⁾として茂⁽⁵⁷⁾みを押し分⁽⁵⁸⁾けていた。悪⁽⁵⁹⁾夢⁽⁶⁰⁾に駆⁽⁶¹⁾り立⁽⁶²⁾てられ、柔⁽⁶³⁾らかな熊⁽⁶⁴⁾皮⁽⁶⁵⁾の寝⁽⁶⁶⁾床⁽⁶⁷⁾から飛⁽⁶⁸⁾び出⁽⁶⁹⁾したのである。貞⁽⁷⁰⁾節⁽⁷¹⁾な妻⁽⁷²⁾のトウツクも、花⁽⁷³⁾も盛⁽⁷⁴⁾りの青⁽⁷⁵⁾春⁽⁷⁶⁾に光⁽⁷⁷⁾り輝⁽⁷⁸⁾いている愛⁽⁷⁹⁾らしい娘⁽⁸⁰⁾のエーギル⁽⁸¹⁾も彼⁽⁸²⁾の暗⁽⁸³⁾澹⁽⁸⁴⁾たる不⁽⁸⁵⁾機⁽⁸⁶⁾嫌⁽⁸⁷⁾を払い除⁽⁸⁸⁾けることができなかつた。アース神⁽⁸⁹⁾族⁽⁹⁰⁾の神⁽⁹¹⁾意⁽⁹²⁾により彼⁽⁹³⁾の家⁽⁹⁴⁾系⁽⁹⁵⁾の滅⁽⁹⁶⁾亡⁽⁹⁷⁾が決⁽⁹⁸⁾定⁽⁹⁹⁾されたのであり、それが夢⁽¹⁰⁰⁾の中で告⁽¹⁰¹⁾げられたのである。アタフルフ⁽¹⁰²⁾が荒⁽¹⁰³⁾涼⁽¹⁰⁴⁾たる道⁽¹⁰⁵⁾に踏⁽¹⁰⁶⁾み迷⁽¹⁰⁷⁾っているのはそのせいだつた。彼⁽¹⁰⁸⁾は小⁽¹⁰⁹⁾径⁽¹¹⁰⁾の行⁽¹¹¹⁾く手⁽¹¹²⁾を塞⁽¹¹³⁾ぐ藪⁽¹¹⁴⁾や若⁽¹¹⁵⁾木⁽¹¹⁶⁾をかつかとしながら巨大⁽¹¹⁷⁾な棍⁽¹¹⁸⁾棒⁽¹¹⁹⁾で薙⁽¹²⁰⁾ぎ倒⁽¹²¹⁾した。霧⁽¹²²⁾の面⁽¹²³⁾紗⁽¹²⁴⁾はますます深⁽¹²⁵⁾く垂⁽¹²⁶⁾れ込⁽¹²⁷⁾め、周⁽¹²⁸⁾圍⁽¹²⁹⁾は暗⁽¹³⁰⁾く、踏⁽¹³¹⁾破⁽¹³²⁾しにくくなる一方⁽¹³³⁾。彼⁽¹³⁴⁾は既⁽¹³⁵⁾に森⁽¹³⁶⁾の中

で一夜を明かそうと覚悟していた。見透かすことのできない闇のせいで己が巖の宮居へ帰る道を見つけ出せなかったからである。そこで野宿によさそうな時を捜そうとしたところ、霧を通して遙かな明かりが血紅色にまたたくのが見えた。なんとも心決めかねるまま、彼はただぼうつとそちらへ足を運んで行った。辺りは前より明るくなった。彼が行き着いたのは洞窟の入り口で、火が燃えているのはその中。奥へ踏み込もうとした時、くぐもった声が洞窟の裡から響いて来た。

「スヴィンダの住まいにあえて近づくは誰ぞ。

巨人の乙女の安息を乱すは誰ぞ。

恥知らずには罰を、罰と死とを」。

巨人は中へと叫んだ。

「な、憤りそ、乙女子よ、

焰にて照らし廻れる、オーデインの巫女殿、

恐れを知らぬ旅人に、一夜の宿りを許されよ」。

すると明明と照らされている巖穴の中から再び声が聞こえた。

「宿られるがよい、恐れを知らぬ旅人殿」と。長い通路を背を屈め、アタフルフは火を目指して歩いて行った。洞

窟は壮大で広豁、高い腰掛に座を占めているのは一人の乙女で、全てを探り出す女神ヴェルのように炯炯たる眼差し、鼻息荒い翼ある駒にまたがり、ごったがえす戦鬪の真つ只中に突入、勇猛果敢なつわものどもが天晴れな討ち死にを恐れぬよう妖しい蠱惑で鼓舞して廻り、それから彼らをヴァルハラでの戦遊びと勝利の宴に連れて行くヴァルキュリエたちのごとき美貌。

火と乙女の高御座のぐるりには環状に髑髏と骨が奇妙な形に組み合わされて置かれ、幾つもの大きな、岩で刻まれた卓にはルーネ文字の神秘的な印が彫り込まれていた。スヴィンダが呪文とルーネの真言を小声で唱えると、環になった形はびくびくと蠢いたかのように入れ、火炎は彼女に向かつて低く靡いた。焔の上に掛かっている釜の中身を彼女はゆっくり掻き回した。高く立ち昇った湯気は不可思議な形になる。アタフルフはみじろぎもせず、あるいは妖女を、あるいは釜を凝視し続けた。と、突然沸騰が鎮まり、焔は洞窟の広豁な空間を暗皓と照らしながら、一層明るく燃え上がった。スヴィンダは腰掛からすつくと立ち上がった。アタフルフは彼女が自分と同じ身の丈なのを知ってはつと驚いた。波打つ金髪の巻き毛は厳めしい長身に沿ってさつと垂れ下がり、頭上には冠が輝き、片手に今までの釜を掻き混ぜていた石の大きな匙を持っている。釜の中を覗くように、と乙女は身振りで指図し、巨人はこれに従った。が、魔法の釜の中身を一目見遣った途端、仰天したアタフルフは戦いて後ずさつた。彼が見たのは頭を打ち砕かれた血まみれの若者の姿。しかし、その面立ちをしかと目に捉えぬうちに、それは消え失せてしまった。また別の映像が愕然としている男に示された。摩訶不思議な光が周囲を囲んで流れている真ん中に屹立している高く美しい城館だが、これまたすぐさま瓦礫の山と崩れ去つた。

それから彼が見たのは、どこかの湖でざざあんと高浪のどよめく様子。もの優しい、しかし血に染まり、髪を振り乱した女性が、荒れ狂ううねりと闘っていた。もつと近くでつらつら眺めようと、深深と背を屈めたが、その前に女

性は暗黒の深淵へ沈んでいた。それからもやまと濁ったかと思うと、釜の中は澄んだ液体となり、またしても沸き立った。

スヴィンダは峻厳なおももちで巨人に向き直り、珊瑚の唇を開いてこう言った。「アタフルフ、私はそなたを知っている。されどそなたは私と二度と会うことはあるまい。この魔法の釜の裡に見たものを、そなたはもう一度現実に目の当たりにしよう。して、見なかったことが、そなたの末期に起こるであろう。巫女に顕わに示さるるは至極僅かなことどもに過ぎぬ。——我らの別れの時が来た。家までそなたの供をする案内者を付けて進ぜよう。したが、この者を怒らせぬよう心せよ」。

「ウンコー」と乙女が呼べば、洞窟の奥処から這い出して来たのは侏儒のような変化で、火を噴くような目付きをしたこやつ、女主人の足許に平伏。スヴィンダは毛むくじやらのその背中をかの匙で優しくこすってやり、いくらかそちらへ身をこめて、なんとも知れぬ数語を小声で呟くと、再びアタフルフの方を向き、重い匙を力強い右手で軽木切れのように振ってひよいと渡し、そうしながら告げた。

「そなたにルーネが与えるものを受け取るがよい、

その名こそフングロフなれ、⁽¹⁵⁾ けだし巨人を殞すもの。

食事の折には喜びの元、

闘う時には武器たらん」。

こうしたこと全てに心乱され、黙りこくって佇んでいたアタフルフは匙を受け取り、礼を述べかつ更に仔細を訊ね

んものと口を開けかけたが、その時火がぱつと消え、乙女の姿も消え失せて、ぐるり一円真の闇。暗黒の中そこいらじゆうでぎざぎざの岩角に突き当たったり、固い髑髏を踏み潰したりしてから漸く、前をそのそ進んでいるウンコーのざらつく両眼だけが洞窟の出口を教えてくれた。熊もどきの地の精は終始どたと歩き続け、真つ暗な、常闇キンメリアの国の夜を照らす星も月明もない。なぜなら、太古の巨人時代には永久の霧が踏み越えられぬ原生林を蔽っていたからである。アタフルフは黙黙と随いて行った。洞窟へ戻る道を憶えようと努めたが徒労だった。巨人の足が雪の中に残す深い痕跡は凄まじい勢いで押し寄せて来る疾風にすぐに吹き払われてしまった。歩き辛い小径は果てしなかった。巨人は、案内の妖怪が自分を稲妻型ジグザグに引き回し、朝が訪れるまで嘲弄しようとしているような気がした。怒りに燃えた彼ははずかすかと大股で後を追ひ、手が届くと思つた瞬間、匙を大上段に振りかぶり、法外な苛立ちいらだに駆られるまま、強烈な必殺の一撃をウンコー目掛けて打ち下ろした。すると怪物は振り向きもせず、矢のような速さで茂みに跳び込み、唸うなるような声で明らかにこう告げた。

「その名こそフングロフなれ、けだし巨人を殲すもの。

そが脅おびやかすは、嫉み屋ナイトハルトよ、そなた自身にほかならぬ」。

アタフルフは荒荒しく藪を打ち叩いた。藪はその激しい打撃に遭つてずたずたにされた。が、ウンコーは消え失せていた。

彼は己が宮居の戸口に立っていたのである。

〔二〕

巨人にして強大な魔法使いであるフロトの息子インゴマール⁽¹⁹⁾はもう長いことひそかにアタフルフの美しい娘エーギルに想いを懸けていた。しかし父たちは、近所同士のくせに、遙か以前から憎みあっていたので、恋い慕うインゴマールの切なる願いが成就する見通しは金輪際ありえない。

この巨人の子は端麗なること、怯めず臆さず敵に立ち向かい、狂猛な闘いの口火を切るオーディンの実子テュール⁽²⁰⁾のごとく、強健にして潑刺たること、雷神の息子ウラーさながら。彼に弓を引き絞ることを教えたのは戦の場自体。その父が住んでいる丘から、アタフルフの水晶の城——その館には最愛の者が隠されているわけだが——が立っている隣の山まで、彼は一ツエントナー⁽²¹⁾もの目方がある岩塊を楽楽と投げることができた。地底深くの洞窟で暗黒の魔術に耽り、おぞましい目的のために自然の深奥の秘密を孜孜として探求している父親を尻目に、こちらは森や野原を余念なく彷徨い、その剛毅な腕で巨大な牡猪や猛猛しい熊を少なからず仕留めたし、その矢が、このうえもなく高い巖頭に巢食っている堂堂たる鷲に的中することもしばしば。

隣り合っている二つの山の間の一つの泉が湧き出していた。澄んだ水の迸るさまはあたかも、全世界にその枝を拡げるかの柁⁽²²⁾のユグドラシルの根元にあるミーミルの泉のよう。エーギルはしばしば聖なる柏の木木の影に覆われているこの泉にやって来て、神聖な蔭の中の、緑滴るふくふくした苔の上で憩うのだった。——彼女は満ち足りた思いで、乱されず、濁ることなく、自分のこよなく麗しい姿を映してくれる水晶のような水面を覗き込んだもの。

インゴマールもまたしげしげとこの寂しい噴泉へと来たが、それは可愛いエーギルを眺めんがため。しかし言葉を掛ける勇氣などなく、いつも身を潜める藪の中から清らかな乙女に純情な視線を投げるのみ。ある時エーギルはいつ

もの刻限に柏の聖林を訪れ、その下に立ち、小さな片手の花も盛りのかんばせに当て、物思わしげに澄んだ水面に見入っていた。すると、自分が佇んでいる柏の木の下、遠からぬところにだれかがいるのを清らかな鏡面に認めたのである。このきりりとした容貌の主は姿を現したかと思うと、揺れ動く榛の木の茂みに隠れたりするのだった。生むすめ娘らしく恥らつて周りを見回したエーギルはびっくり仰天した。だって、ここにいるのは自分独りと思ひ込んでいたのに、金髪の巻き毛の丈高い青年が、こちらへ歩み寄つて来たのだから。彼女は逃げようとしたが、若者は甘い声音で懇願した。その声はこれまで一度も耳にしたことのないほど快い響きで、その顔はなんとも端麗。誠実で碧い目はその口よりも彼の気持ちをも物語っていた。目にはそれと留まらぬシェブン(27)が二人の上に漂い、春の目覚めの無上の歡喜を少女の無垢な胸の裡に呼び覚ました。そこはこれまで淑やかな貞潔の女神ゲヴィウン(28)が治しろしめしており、スノトラ(29)が淑徳と無垢という薔薇の面紗ヴェールで包んでいたところ。インゴマールはおずおずと自らの恋の経緯つたえを、つまり、あまたたびここで彼女を待ちもうけていた、とか、姿を見て嬉しくてたまらなかつた、とか、麗しい容姿がどんなに深く心に刻み込まれたことか、とかを、とつとつと打ち明けた。

エーギルはこれまで恋なんぞ一度もしたことはなかつたし、こうした若者を目の当たりにしたこともなかつた。それでもやはり、夏ともなれば、泉のせせらぎに耳を傾ける折節、林に鳥たちの歌声が響き渡り、花花が嬉しそうに辺り一面咲き匂うたび、遣る瀬無いひそかな物思いで心がいつも一杯になった。近くにいられても煩わしくないだけかが欲しいなあ、と願つたもの。なにせ女友だちは一人もおらず、家庭となると、専横に取り仕切る母親、乱暴でがさつな父しか知らないわけ。時々訪れる父親の仲間と来たらどれもこれも父同様粗野で陰気な御仁ばかり。だからこの綺麗で親しみ深い青年を好きで堪らなくなつたのは当然といふもの。でも彼女は臆病になつて後うしろずさり、急いでおうちへ帰りたくなつた。が、灼熱の初恋に身を焼くインゴマールはエーギルをぎゅつと抱き締めて、また戻つて来ます、

と彼女が誓うまで、渝らぬ恋の証として無上に甘美な接吻をしてもらうまで、離そうとはしなかった。

さてそれからというもの、エーギルはいや増して足繁く泉に通うようになったし、恋人は早くもそこで待ち焦がれていた。二人は腰を下ろすなり互いにひしと抱き合い、林の歌鳥たちの啼き音に聴き入り、香り高い花を楽しんだ。兩人が何を囁き合ったか、言い伝えは語っていない。さはさりながら、すてきな乙女は若者にとつてますます可憐な存在となり、エーギルもまた逞しいインゴマールをますます愛しく思うようになった。

ある時二人はひっそりと水入らずで清らかな恋の至福の幾刻かを楽しみ、信実の相思相愛のうちに、この現世で既にヴァルハラ of 歓喜を見出したもの。そしてとうとうインゴマールは大事な女に、自分が相手の父の仇敵の息子だと打ち明けた。それから彼らは、父親同士の敵愾心を和らげる手立てを全て試みてみよう、もしそれが叶わなければ、びくびくせずに愛の幸せを差し障りなく味わえるような、どこか遠いところに駆け落ちしよう、と語り合った。別れの時が来て、インゴマールは山の麓まで恋人を送って行った。身を隠してくれた茂みから歩み出た二人は、長いこと名残の接吻を交わして渝らぬ愛を誓った。インゴマールが茂みに戻るのをなおもぐずぐずためらっていると、巨大な巖の塊がぶうんと落ち掛かり、青春の只中にある端麗なインゴマールは頭をぐしゃぐしゃに碎かれ、血みどろになって、一言も発することなく、身をこわばらせたエーギルの足許に倒れ伏した。同時に彼女の父の恐ろしい雄叫びが、雷鳴のように山に飮したのである。——この暴れ者は居城のある山の頂きから、どこぞの若者が愛娘を抱き締めているのを目にし、それが不倶戴天の隣人の息子であることを鷲のように鋭い眼力で見届けるやいなや、破廉恥なならず者に娘が襲われているもの、と思ひ込んで激怒、若者の頭目掛け、逞しい、狙い逸らさぬ手から致命的な飛礫を投げたわけ。——彼はどつと駆け寄ると、震え戦くエーギルを荒荒しくぐいぐい引つ張って己が住まいへと無理やり連れて行った。

インゴマールの父フロトは邪悪な企みを胸に育みながら専用の魔術部屋に座っていた。これは住まいの下、大地の胎内深くに、穹窿状にしつらえたもの。灼熱した炭がばちばちと音を立てて彼の周囲に火花を飛び散らせていた。鋭利に仕上げているのは彼の発明になる道具である青銅の劍。それと言うのも、巨人たちはその頃まだ巨大な棍棒、遠くの的に当たる弓、石製の戦斧しか知らなかったからである。と、その時、アタフルフの怒り狂ったわめき声が地底の彼の許まで響いて来た。仇敵の声音はよくよく心得ている。フロトは上へ昇って行き、家の一番高い尖塔から敵の棲処を見遣った。陰鬱な眼差しを更に下へと向けて行くと——なんと、一人息子の亡骸が目にと留まったのだ。最初の、恐ろしい驚愕の一瞬に続いて、凄まじい憤怒が沸き起り、誰が犯人か即座に推し量るなり、彼は愛する死者が横たわっている泉へ突進、家へ運び込むと、できる限りの手立てを講じて、打ち殺された息子に活気溢れる生命を呼び戻そうとした。しかし、何もかも実を結ばぬ。そこで彼は無量の苦悩に浸り、息子の殺害者である不倶戴天の仇敵への復讐を、燃え立つ復讐を、邪神ロキの娘ヘル——全大地を締め付けている蛇ヨルムンガンダのはらから——に懸けて誓った。ヘルはこれら全てを支配しているのだ。

アタフルフは輝く石灰石の我が家に安閑として寝そべり、満足しきってエーギルを眺めていた。彼女はひっそりと恋人を哀悼しており、そのため父親の目には一層たおやかな風情だった。アタフルフは貞節な妻のトゥックが用意してくれた食事を賞味しているところで、フロトが早くも息子の死を発見し、自分を殺害者だと看做すことなど、恐れではないなかった。力量でも体の大きさでも敵に引けは取らないのだ。ただし、魔法使いの超自然的な術は避けねばならないので、賢く立ち回って相手と決して出くわさないよう用心していた。今彼は、エーギルとトゥックを傍に、巨大な石槽を前に横臥し、妖女であるかの乙女がくれた重い石の贈り物を現代の羹汁匙のように使って、槽になみ

なみと湛えられた野牛(33)の肉汁をせっせと掬すくっていた。哀れな娘の心を引き裂いた己おのれの英雄的偉業にほくそえみながら。——その時三人の足の下で地面が振動、それがずんずん強くなり、壁に架かっている打ち倒された敵どもの頭蓋骨ももろともに震え、落下して、部屋を転げ回った。邸の門が轟然と崩壊、ずしずしという大音響が空気を騒がせた。さながら嵐の神ニヨルド(34)が颯颯さつさつとざわめく翼で飛び回ると、天界の礎いしずえすら揺らめくように。——そしてアタフルフの耳を劈つぎいたのは下男が挙げた死の絶叫だった。彼は食事の席から跳び起きた。この瞬間したたかな足蹴を受けて部屋の石の両扉が内側へ碎け落ち、アタフルフの前に進み出たのは、目を憤怒と復讐の狂気でぎらつかせている畏怖すべきフロトで、恐ろしい魔法の物の具に身を固めている。頭の青銅の被り物を取り巻く互いに絡み合った三匹の蛇は、敵に向かって舌の毒矢を突き出し、こちらが一瞬声を呑んで立ちすくむ隙に、荒れ狂うフロトのきらめく剣はトウツクの雪華石膏アラバスターのような胸に深深と沈んだので、彼女は呻きながら崩折れた。その時アタフルフは逞しい両の手でずっしり重い匙を大上段に振り上げ、凄まじい必殺の一撃を与えようとしたが、報復者の魔法使いはぞっとするような高笑いを挙げ、とてつもなく大きな盾を振りかざした。するとあのルーネ文字の洞窟にいた熊もどきの怪物が盾から電光のように燃える目で睨みつけ、唳しやがれ声で、あの時と同じことを語り始めた。

「その名こそフングロフなれ、けだし巨人を殛すもの——」

しかしアタフルフは言葉が終るのを待ちはせず、匙を両手から取り落とし、脇扉から倉皇そうごうとして逃げ出した。フロトは、血を流している母親の傍らにがつくりと膝を突いて泣いているエーギルをそのままに、床に落ちたフングリフを掴むと、逃げ去る仇を猛然と追い掛けた。こちらはその間に盾と棍棒を手にし、追手と戸外の闘いで相まみえよう

とした。しかし、彼が振り向く前に、なんとも重い匙がうなじに命中したので、大声で吠えるなりずしんとぶっ倒れた。荒涼とした巖頭に巢食っている鴛や禿鷹は悉く仰天し、ぎゃあぎゃあと啼きながら巢から飛び立った。アタフルフが倒れた衝撃で大地は何哩にも亘って震撼し、かつと開いた巨人の口から血が川のように流れ出し、この山の土を紅く染めた。そして今日に至るまでなおそうなっている。

一方荒れ狂うフロトは自分が殺した男の棲み家に引き返した。そこでは、トゥックが死の痙攣に石灰岩を震わせながら横たわっていたが、これに幾たびもしたたかに剣を浴びせて止めとし、縮こまっているエーギルを母親の亡骸から引き離し、巨人の家を全部めちやめちやに叩き壊し、山の一部を廢墟とこれらの屍の上に投げ捨てた。それからまた、泉から程遠からぬ、息子が息絶えたあの場所の地中深く、例の匙を突き刺して永遠の記念碑とした。次に自分の住む山の高処から薄倅の巨人の娘を空中に放り投げ、とある小さな湖の波間に沈めた。波は泡立って岸边という桎梏を打ち碎き、周囲の平野を遙か彼方まで水浸しにしたのである。復讐の渴望も今は鎮まったフロトは、仕返しを果たしてやったインゴマルを、彼が倒れたその場所に埋葬したが、その後間もなく懊惱のあまり死んでしまい、暗黒のニフルヘイムでヘルに迎えられた次第。

けれど、相思相愛の二人の魂は優しい、こよなく美しい愛の女神フレイヤが光の国へ、七色の虹の橋を渡って至福の神神の宮居なるアスガルドへ連れて行つた。輝かしい光明と花咲き誇る春がこの愛らしい女神を取り巻いている。典雅と愛の魔法で身を飾った彼女の二人の娘ノッサとゲレセミが連れ立ち、黄金なす巻き毛の腹心の友フツラと、侍女である暖かい友情の女神フリンが扈從。女神の極まりない美しさ、優雅さ、温和さという黄金の陽光に乗って先払いするのは、使い女のグナーで、女神らの到来をアスガルドに注進する。天界の住人たちはヴァルハラ(1)の血腥い戦士の宴をよそにして友情と愛の宮殿たるヴァインゴールヴへと飛んで行つた。再び巡り合った恋人たちは、

歓びが治ろしめすグラドヘイム⁽⁴⁵⁾に安着、グラゾーア⁽⁴⁶⁾なる林苑の黄金の木木の下、今は果てることのない恋を水入らずで楽しみながら、ふっくらした臥床でしばしば憩うのだった。

暗い森の洞窟の神秘な女スヴィンダは魔法使いフロトの妹だった。同じく魔法使いのだが、彼女には更にもう一つ、所持する魔法の釜の中で未来の秘密を覗かせるという能力があり、陰險な兄としめし合わせて、アタフルフの滅亡に手を貸したのである。さりながら、かの巨人が殞れ、フロトが死に、それからだんだんに巨人族が没落して行く、彼女は魔法の釜を泉の深处に沈め⁽⁴⁷⁾、己が洞窟に引き籠り、二度と姿を現さなかった。さて、この釜だが、きらめく青銅を満たして、後世しばしば水面に浮かび上がった、とのこと。もつとも、だれかがこれに手を差し伸べると、さっと水底に潜⁽⁴⁸⁾ってしまったそうだ。

この暗澹たる伝承はとうの昔に湮滅⁽⁴⁹⁾したが、それでもあの晴れやかで清涼な泉から程遠からぬところに今なお丈の高い石が立っていて、民衆は老いも若きも「巨人の匙⁽⁵⁰⁾」と呼んでいる。美⁽⁵¹⁾し国テューリリングゲンを旅し、物見遊山をしたい、とご希望の向きは、アルンシュタット⁽⁵²⁾を抜けて北西方向、ゴータへ通ずる道を行かれるとよろしい。すると、こんもりとした高処にその石が見える。左手西方にはカルク山⁽⁵³⁾が望まれる。アタフルフが石の堆積の下に横たわっているのはここ。右手にはアルンス山⁽⁵⁴⁾がある。これはドイツのびっしりと生い茂った叢林や登攀できない絶壁がまだ驚たちの棲み家だった昔にはアーレン山⁽⁵⁵⁾と言ったもの。これらの山山には往古の住人の痕跡も見当たらないが、アルンス山⁽⁵⁶⁾の山蔭にはいまだに小さい池と草原があり、これらをぐるっと取り巻く柳の古木が、かつてここで水がざわめいていた証拠となっている。今はただそよ草が西風に吹かれてさらさらと鳴るのみだが。これこそフロトが薄倅のイーギルを投げ込んだかの小さな湖で、今日なおこはイーギル湖⁽⁵⁷⁾、あるいはエーゲル湖⁽⁵⁸⁾と呼ばれている。

アルンシュタットなる聖母⁽⁵⁹⁾教会の正面入口の内側、石の追持⁽⁶⁰⁾の上に取り付けられているいとも大きな肋材――

俗信によればある巨人の肋骨とされる（原注）——は、闇に包まれた太古に、より強大な種族が存在したことを証明するものではなかるうか。さようなことはないにしても、創造性に富む空想はこうした無邪気な夢の数々に耽るのが好きで、げにもめでたき昔話と妖精の世界を描き出す華やかな漆喰壁画を楽しむのである。これらの絵は、あるいはもの凄くも恐ろしく、見る者を慄然とさせ、あるいは朗らかで優雅、親しみ深く潑潑としたさまで、魔法の角灯「幻灯機」の映像にも似て、楽しげにこもこも入れ替わりながら通り過ぎて行く。

原注

俗信によればある巨人の肋骨とされる 枢密顧問官フォン・ヘルバハ氏の学識あり且つ深遠なる著作『古き聖母教会等に関する報告』、アルンシュタット刊、二二六ページを参照のこと。Siehe des Herrn Hofrat von Helbach gelehrtes und gründliches Werk: *Nachricht von der alten Lieben Frauenkirche etc. etc. : zu Arnstadt*, Seite 26.

訳注

- (1) 馴鹿 とんが Renntier. 体長二メートルほど。雌雄ともに角を持つが、牝の角は小さい。北極を取り巻く地域に広く分布、北欧やシベリアでは家畜化されている。
- (2) 水牛 とんが Büffel. 牛の最も原初の亜種。原初のもは体高一メートルほどだったようだ。野生の水牛は南アジアやアフリカの沼沢地には現代でも棲息。これは体高約一・八メートルにも達し、左右に張った四メートルにもなる巨大な角を有する。
- (3) 巨人 リッゼ Riese. 北欧神話にあつては、灼熱と寒冷から原初の巨人ユミル（両性具有か）が作られ、彼／彼女の養母的存在であるアウズフムラという牝牛が舐めた塩辛い霜の石からブリーリという男が出現した。ユミルからはまた「霜の巨人」という種族が生まれた（単性生殖）。ブリーリの息子ボルが巨人ボルソルの娘ペストラを妻としてもうけたのが、オーディン、ヴィリ、ヴェーナーなる三柱の兄弟神である。オーディンらはやがて天と地の創造に関わるが、巨人一族の方が神話では先に生成したわけ。ユミル（この屍骸から神神によって日月星辰、陸地、大海原など世界が作られる）がオーディンらに殺されると、霜の巨人たちは一組を除き、ユミルの血の中で溺れ死んだが、滅亡を免れた巨人夫妻から新たな巨人族が生じ、彼らは神神と人間たちを相手にいずれ雌雄を決するべく、人間の居住地ミッドガルドを取り巻く荒れ地、山岳、海洋、またヨツ

ンハイムという巨人の国に住んでいる。すなわち、巨人は本質的には神神に敵対する存在。

- (4) アタフルフ Athulf.
- (5) トック Truck.
- (6) エーギル Egil.
- (7) アース神族 Aesen. 北欧神話の神神にはアース(単数形アーサ) 神族とヴァニール(単数形ヴァン) 神族の二種がある。アース神族を率いるのは、オーディンであり、彼の配偶者は全人類の運命を知る女神フリックである。戦いの神トールを初め、アーサ神族の他の神神はしばしばオーディンの子どもとして位置付けられる。ヴァン神族には航海・漁撈・商業・豊饒の神ニョルド、その双子の子どもフレイ、フレイヤがある。この双子は互いに契りを結んだ。両神族はしばしば戦ったが、最後には講和をして人質を交換している。
- (8) オーディン Wotan. 原典にあるベヒシュタインの表記 Wotan によれば「ヴォータン」という片仮名表記の方が近似値だが、この訳における北欧神話の固有名詞は、中世アイスランドの文人スノリ・ストゥルルソン(一一七九—一二四一)の編んだ『エッタ』の一部「ギェルヴィたぶらかし」(V・G・ネッケル、H・クーン、A・ホルツマルク、J・ヘルガン編/谷口幸男訳『エッタ—古代北欧歌謡集』、昭和四八年、新潮社)の訳文にある片仮名表記に(そっくりそのままではないにしても) かなり依拠した。世界の神祕と魔法に通じる。狡猾で邪悪な半面もあり、極めて複雑な属性を持つ。
- (9) ヴェル Wörra. 原典の表記 Wörra によれば片仮名表記は「ヴェラ」に近いが、前掲注「オーディン」に記した理由により「ヴェル」とした。ヴェルはアース神族のさほど名の知られぬ女神たちの一柱。聡明、かつ極めて穿鑿好き。何事も彼女に隠しおせないほど。
- (10) ヴアルハラ Waltha. 「戦の広間」の意。アース神族の住むアスガルド(人間の住むミッドガルドの中心部に作られている)にあるオーディンの館。アスガルドに行くには、虹の橋を渡らねばならない。ただし橋の袂では聡い目と耳を持ち、ほとんど眠ることのない神ヘイムダルが見張りに立ち、巨人族が侵入しないよう守っている。
- (11) ヴアルキューリエたち Valkyren. 「戦死者を選ぶ女」の意。ドイツ語では普通「ヴァルクューレ」Walküre である。オーディンによつていついかなる戦場にも送り出され、討ち死にした選り抜き勇士たちをヴァルハラに連れて行く。英雄たちは昼はお互い同士戦闘を遊戯として楽しみ、夕刻になると大広間で、いつまでも尽きることのない牡猪セーフリムニルの肉(朝料理されても夜には再生する)を食い、ヘイズルーンという名の牝山羊の乳房から出る強い蜜酒(蜂蜜を原料として醸した酒。ドイツ語「メート」Met、英語「ミード」mead)を酌み交わして、長夜の宴を張る。彼らは「神の宿命」Ragnarök(古代北欧語。「神の黄昏」Götterdämmerung といふドイツ語訳は誤訳)、つまり巨人族がその係累とともに神神に逆寄せする世界の終末時に、神神の味方をして闘う軍兵として徴募されたわけ。
- (12) ルーネ文字 古代のゲルマン文字。「ルーネ」Rune は「神祕」「秘密」の意。

- (13) 妖女 トールグ True. ドゥルルーデ ドールグ Drudeとも綴る。ムゼーウスは「ローラントの従士たち」Rolands Knappenに登場させたビレナー山中の魔女・巫女・女性ドルイド（「ドルイデ」Druide——ドゥルイイとも——は古代ケルト民族の賢者。司祭、施政官／司法官、医師、学者の資質を兼ね備える。しかし女性のそれはなかったようだが）的存在を表現するのに後者を用いている。
- (14) ウンコー ウノク Unkoo.
- (15) フングロフ フングロフ Hunglof.
- (16) 地の精 グノム Gnomwesen. 直訳すれば「地の精的存在」。「地の精」Gnomは大地の中に棲み、金銀・宝石・鉄・銅などを掘り、これを加工して見事な細工物を捨える。鉱山で働く人人は、坑道に出没して悪戯をしかけたりするような存在を、コーボルト クノド Koboldと名付けた。
- (17) 常闇の国の ギメリシ gimmerisch. ギリシア神話によれば、キンメリアは世界の果ての大河オケアノスの西か北にあつて一年中陽光が射すことのない国。その住人をキンメリオイと言つた。
- (18) 嫉み屋 ネイハルト Neidardt. 十三世紀ドイツの叙情詩人ナイトハルト・フォン・ロイエンタール ネイダルト Neidhart von Reuenthal（一二四〇頃）をもじつて、やっかむ（ドイツ語 neidenneiden）人間のことを固有名詞のようにしたもの。ムゼーウスも「沈黙の恋」サムメ Summe Liebe および「宝物探し」デア Der Schatzgräberの中で用いている（ただし綴りは NeidhardtNeidhardt）。そこでは「誘屋 ネイハルト 妬氏」と訳しておいた。
- (19) フロト フロト Froth.
- (20) インコヤール インゴマ Ingomar.
- (21) ヒューネ ヒューネ Hüne. 前出「リーゼ」前掲注「巨人」参照の他にこの「ヒューネ」もドイツ伝説で「巨人」を指す語として用いられる。これは「フン族」フン Hunne、すなわちカスピ海の北部と東部に居住し、四世紀後半ヨーロッパに侵入、西ゴート族を圧迫して民族大移動の原因となった剽悍な遊牧民族に由来する中世低地ドイツ語 HüneHüneを源とする。その拡張最盛期（カスピ海からライン河畔まで支配）の首長はアッティラ（四〇六―四五三）。前三世紀から後五世紀に亘つて中国を脅かした匈奴の分派がフン族であるとか。ちなみにモンゴル語の「フン」は「人」「人間」の意。
- (22) テュール ユフ Tyr. アース神族のうちで最も雄雄しく、勇ましく、戦いの帰趨を決定する。戦闘の神。
- (23) 雷神の息子ウル ユリア Ullar des Donnergottes Sohn. 原典の表記 UllarUllar によれば「ウラー」が近い。「雷神」は（これもオーディンの息子と言われることがある）トール ThorThor（ドイツ語形 DanarDanar）のこと。その武器である鎚（すなわち雷電）は極めて強力で、当たれば敵を粉砕せずにはおかない。ウルは雷神の妻シフの息子で、雷神の継子だ、とのこと。極めて優れた射手で、スキーの名人。端麗な戦士である。
- (24) ツェントナー ユグ Yggdrasil. ユグドラシル、すなわち五十キロ。
- (25) ユグドラシル ユグ Yggdrasil. ユグドラシルとも綴る。古代北欧語「恐ろしく」yggygg + 「馬」drasildrasil から。宇宙全体を支えている。その三本の大

きな根のうち一本はアスガルド（同時に人間界であるミッドガルド）に、一本はヨツンヘイム（巨人の国。前掲注「巨人」参照）に、もう一本は冥府であるニフルヘイム（暗黒と寒冷の国）に延びている。それぞれの根の傍には泉がある。

(26) ミーミルの泉 *Mimerborn* 霜の巨人たちの方に向かってユグドラシルの根の下にある泉。この泉の持ち主がミーミル。スノッリの「ギエルヴィたぶらかし」によれば、常にこの水を飲んでゐるミーミルは知識に満ちている。オーデーンは泉の水を一口飲ませてもらう代償に、自分の片目を支払った。ミーミルは地下の泉を守る予言者的存在の巨人であろうか。

(27) シェヴン *Söva* 原典では「シエナ」*Söna* となっているが、文脈から推察するに、男女の心に情熱を目覚めさせる女神シェヴンのことと思われるので、あえて本文でもそう変えておいた。

(28) ゲヴィウン *Gesione* 原典では上記の *Gesione* と綴られている。s は v か f の誤りに違いない。ベヒシュユタインの誤記か出版社の誤植であろう。なお、スノッリは「エツタ」の中で、彼女は処女神であり、処女のままで死ぬ者は全て彼女に仕える、と述べているに過ぎないが、ベヒシュユタインはこの記事を採用したか。他の伝承によれば別段処女神ではない。ゲヴィウンは巨人との間にできた息子たちである四頭の巨大な牡牛を使って、スウェーデンから豊かな土地を引き離し、海中に置いたが、これがデンマークのシェラン島である、とあるので。

(29) スノトラ *Snotra* 原典では上記の *Snotra* と綴られている。これに従えば「スオトラ」。けれども、該当しそうなのは「スノトラ」だし、スノトラなら賢明で立ち居ふるまいが淑やかな女神なので、こちらを選んだ。

(30) ロキ *Loke* 原典の表記によれば「ローケ」くらいが近い。北欧神話の中で最も特色のある神。その属性は極めて複雑で、本質を解明することは困難である。アース神族の一員ではあるが、その敵対者たる巨人の血も引いているらしい。無害な剽軽者として描かれることもあれば、トールなどに賢明な助言をする随伴者になっていることもある。また、アース神族と巨人族が戦い合つて滅亡し、全世界が灰燼に帰する「神神の宿命」の折、ロキは巨人族側に付く。この場合神神の邪悪な敵となるわけ。トリックスターと考えればある程度は説明できるかも知れない。彼はヨツンヘイムの女巨人アンケルボダとの間に三人の子どもをもつける。これは、全世界を取り巻く大海について世界を締め付ける大蛇と、冥府を司る女神ヘル、巨大な狼フェンリル（この恐ろしい怪物は神神の企みで縛められているが、「神神の宿命」の際縛めはちぎれて自由になり、オーデーインに襲い掛かってこれを呑んでしまう）という、いずれも恐ろしい存在である。

(31) ヘル *Hela* 原典の表記によれば「ヘラ」が近い。「隠すもの」を意味する。病死了た者、定命^{じやうめい}で亡くなった者が赴かねばならぬ黄泉の国ニフルヘイムの支配者たる陰鬱な女神。

(32) 蛇ヨルムンガンダ *Schlange Jormungandur* 原典の表記によれば「ヨルムンガンドゥール」。全陸地を一巻きにした上、己が尻尾をくわえている世界蛇。「ミッドガルドの大蛇」とも言へ。

(33) 野牛 *Auerochs*、アウアーオクス。アウアーオクセ *Auerochse*、オーロックス *Aurochs*、あるいは、ウール *Ur* とも。歴史時代までヨ

ロッパ、中央アジア、南西アジア、北アフリカに棲息していた野生の牛。牡の場合、体長約三メートル余、肩丈一・八メートルほど、体重一トンにも達し、ヨーロッパ最大の陸生動物だった。これらの地域の畜牛はこれを家畜化したもの。ヨーロッパ最後のウールは十七世紀にポーランドで絶滅した。一説に、マゾフシエ Mazowsze 地方のある野獣園で生涯を終えた、と。あるいは、一六二七年にヤクトルフ Jaktorów の森で密猟者たちに仕留められた、とも。

(34) 嵐の神ニヨルド Nord, der Stürme Gott. 原典の表記 Nord によれば「ニオルト」に近い。前掲注「アース神族」参照。ヴァン神族の豊饒神であり、風と海に結び付いている。

(35) フレイヤ Freya. 前掲注「アース神族」参照。ヴァン神族からアース神族に移った女神。豊饒、愛情を司る。オーデインの妻フリッグが北欧神界の妃ではあるが、このフレイヤも女王的存在である。むしろ北欧各地でただ一人の女神として尊崇されていたようでもある。生と死、愛情と戦闘、豊饒と黒魔術といった背馳相反するものを包含し、命を与えると同時に奪う者、との解説すらある。こうなると大地母神のごとき存在と言つてよいのかも知れない。

(36) 虹の橋 Brücke Bifrost. 地上から天、つまり、人間界からアスガルドに架かっている橋。「ビフレスト」。前掲注「ヴァルハラ」参照。

(37) ……アスガルドへ連れて行つた 以下はフレイヤについてはなく、フリッグについての「ギユルヴィたぶらかし」の描写にかなり相応する。

(38) ノッサ Nossá. 未詳。

(39) ゲルセム Gersum. 未詳。

(40) フッラ Fylla. 処女神。原典の表記によれば「フッラ」に近い。フリッグ（フレイヤではない）の櫃や履物を管理し、その秘密に与つてゐる。

(41) フリーン Hlyn. 原典の表記によれば「フリユーン」に近い。フリッグ（フレイヤではない）が守つてやろうとする人人の後ろ盾となる女神。

(42) グナー Gna. フリッグに命じられてさまざまな世界への使者となる。空も海も疾駆するホーヴヴァルブニルという馬に乗つて。

(43) ヴィーンゴールヴ Wíngölf. アスガルドにある女神たちの美しい宮殿。人間は神神に息を吹き込まれた存在なので、肉体が減じて土となつても生き続ける、と「ギユルヴィたぶらかし」にある。礼節を弁えた善良な人間は、ヴィーンゴールヴへ行つて、神神とともに暮らし、悪い人間はヘルに赴く。

(44) グラドヘイム Grahðeim. アスガルドにある内も外も黄金色に輝く大神殿。ここには主神オーデインの座る玉座の他に十二の座がある。

(45) グラゾーア Grazilor. 未詳。「ギユルヴィたぶらかし」にはアスガルドその他を流れる河が列挙されていて、その中に「グラーズ」なる名が挙げられているから、あるいはこれか。ただし、前掲書では、アスガルドを巡る河とは明記されていない。

(46) 魔法の釜を泉の深处に沈め「釜の泉」Kesselbrunnenと呼ばれる泉がこれで、巨人の匙の近くにあり。

(47) 巨人の匙。Riesenspfel. 「巨人」Rieseの「匙」Löffel。表題の掘って来たる所以である、匙に似た大きな石の造形物。アルンシュタットの中心から程遠からぬところにある。高さ二・二五メートルで砂岩製。一つの石から作られている。聖龕(聖像などを納める厨子)状の形をした上部構造が、断面が四角の、面取りをした柱身に載っている。上部構造には尖頭迫持型の壁龕が削り抜かれているが、そのすぐ下の柱身上部にも同じ形の、しかしもつと小さい壁龕がつけられている。町域内を巡って聖餐式を挙げるお練り(祈願行列)——これはとりわけ聖体の祝日(復活祭後の三位一体の祭日の週の木曜日、すなわち復活祭から六十日目に行われる。最も早くて五月二十二日、最も遅くて六月二十一日)の折、こゝまで司祭に捧持されて来た聖体顕示台が上部の大きな壁龕に置かれ、下の小さな壁龕が聖体顕示台から取り出された聖体、すなわち「久遠の光」(神)の象徴である聖餅(聖餐式のパン)——ホスチアの安置場所となつたか、と思われる。ちなみに聖体顕示台とはカトリック教会の祭器で、聖餅、あるいは聖遺物を容れたガラス、ないし水晶製の容器の周りに、通常は貴石や寶石を鏤めた銀など貴金属の光輪を取り付けたもの。幅広い脚部を持つ。

これは一五〇七年建てられた。この歳の聖マルクス祭(四月二十五日)のお練りについて次のような伝承がある。「釜の泉の傍にある聖体顕示台の壁龕のところに来ると、聖体顕示台の中の秘蹟(聖餅、聖水などを指す。こゝでは聖餅)がここに安置されて定められた儀式がその傍らで執行され、それから更に先へとお練りが進んだ」と。

やがて宗教改革がテューリンゲンに及び、この地方が新教に帰属し、カトリックの祭祀である祈願行列が行われなくなると、こうした用途はすっかり忘れられてしまったようだ。一六五二年の文書には、単なる耕牧地の目印として「釜の泉の畔の長い石の傍」といった記述があるそう。

「巨人の匙」という名称はどうやら十九世紀初頭のロマン主義の時代に発するようである。そしてこの名称を地域の境界を遙かに越えて広くかつ、少なくとも十九世紀末あたりまで長期に亘って、普及・維持するのに力あったのは、もとよりベヒシュタインのこの物語にはかならない。巨人の匙は一九七一年ソ連軍の戦車に轢き倒され、三つに砕かれたまま、翌年一九七二年アルンシュタットの城館博物館の庭園に運ばれ、転がされていたが、一九八二年十月十五日篤志の市民たちが城館博物館の南翼に近い庭園に復元。一九九四年アルンシュタットの城館博物館の庭園に運ばれ、歴史協会その他のメンバーによって本来の場所であるハールホイザー・シュトラッセ脇に移された。(以上は、「トゥッカラント新聞」Tuckerand-Zeitung 第三四号掲載記事——筆者史料保管係ペーター・ウンガー Peter Unger——を主要材料として、訳者が纏めたものである)。



リーゼンレッフエル

<http://www.fotolibrary.de/foto/Riesenloeffel.html>

- (48) アルンシュタット Arnstadt. 中部テューリンゲンの中部市。エアフルトの南方二〇キロほどのところにある。ベヒシュタインは一八一八年から一八二四年に掛けてこの町の薬局「ウンター・デア・ガレリー」Unter der Galerieで徒弟修業に入り、やがてこれを終了（テューリンゲンの民話『Thüringische Volksmärchen』を出版したのはアルンシュタット時代の一八二三年のことである）。以降マイニンゲン、バート・ザルツンゲンで薬剤師主任助手を勤めた。十九世紀の人口は一八一四年四千余、一八九〇年一万三千弱（二〇〇六年現在二万五千余）。テューリンゲンの豪族の一つだったシュヴァルツブルクカッソーンスハウゼン家のかつての城下町。ほどほどの産業基盤を持ち、伝統ある文化の中心で、保養地でもある。古くはヘルムフェルト家の代官としてケーフェルン伯爵家が治めていたが、一三〇六年シュヴァルツブルク伯爵家の手に渡り、同家は一七〇六年までここに宮廷を開いていた。ローマの軍事殖民諸都市以外ではドイツ最古の由緒（七〇四年古文書に初出）を誇る。エアフルトやアイゼナハとともにかのバッハ一族ゆかりの町でもある。
- (49) カルク山 Kalberg. 「石灰の山」Kalkbergではないが、音は同じ。これがアタフルフトとトゥック夫妻が一人娘のエーギルとともに住んでいた山なのだろう。彼らの家の床は石灰岩でできていたようだから。
- (50) アールンズ山 Arnberg.
- (51) アーレン山 Arenberg. 綴りがArenberg（音は同じ「アーレン・ベルク」なら「鷲の山」と言う意味になる。AarはAdler（アードラー＝鷲）の古語。ムゼーウスの『三姉妹物語』Die Bücher der Chronika der drei Schwesternにも、鷲伯エドガーEdgar der Aarがスイスに建設した町が後にその名に因んでアールブルクArburgと呼ばれた」とある。
- (52) エーギル湖 Egl-See.
- (53) エーゲル湖 Egel-See.
- (54) 妖精 Fee. フランス語feeから。ラテン語「運命」fatumが語源か。十七世紀後半から十八世紀に掛けてのフランス王国では妖精を狂言回しとする「妖精物語」conte de féesが流行、ドイツ語圏でも大いにはやされた。殆どは上・中流階級の閑秀作家の著作で、例外はシャルル・ペローの『過剰し昔の物語あるいはお伽話』ならびに教訓『またの名『鷲鳥おばさんのお伽話』（一六九七）Charles Perrault: Les Histoires ou Contes du temps passé. Avec Moraltitz (= Morality) / Contes de ma mère l'Oye (= l'Oie)。
- (55) 魔法の角灯「幻灯機」magische Laterne. ラテン語「ラテルナ・マジカ」laterna magicaのドイツ語訳。ムゼーウス著『ドイツ人の民話』Volksmärchen der Deutschen 序文である「我が畏友、思想家にして、* * *市の聖ゼーバルト教会聖物保管係ターフィート・ルンケル殿に捧げる緒言」にもこの言葉が繰り返して出て来る。従って、これを書く時も、『ドイツ人の民話』がベヒシュタインの脳裡に描曳していた、と考えてもよいかも知れない。初期のスライド式幻灯機である。イエズス会の修道士にして学者であるテューリンゲン生まれのアタナシウス・キルヒャー Athanasius Kircher（一六〇一—一八〇）によって発明されたラテルナ・マジカに始まる。ガラス板に描かれた壮麗な建造物や雄大な風景、珍奇

な人種・鳥獣・草木の姿などを、これを用いて壁に映し出す真つ暗な小屋の中での見世物は、十八世紀から十九世紀に掛けて西欧の子どもたち
に人気があったことは確か。

解題

「巨人の匙 ——ある昔話」の原題は Der Riesenlöffel. Ein Märchen. である。

テューリンゲン地方のアルンシュタット近郊に近世初頭に設置された石の造形物、通称「巨人の匙」に纏わる伝承が、ベヒシュタインによって、ちよつと変わった太古北欧風絵巻物に仕立て上げられたわけ。もつともこの絵巻物は彩色されておらず、白黒のみの陰鬱な墨絵とでも言うべきか。

結びに一言。聖体顕示台とその透明な容器部分に納められる聖餅について、土屋和彦司祭（畏友土屋正彦氏の令息）にお教えを乞うた。また、ポーランドの地名の片仮名表記について、ヨーロッパ比較文化学科の同僚阿部賢一准教授にお助け戴いた。土屋さん、阿部さん、まことにありがとうございます。